



若手・中堅漁業者が政府や水産改革に何を求めるか、解き明かす連載の第3回。取材対象者中、資源の減少を指摘する人と、資源の増減の原因究明を求める人はともに9割近くに及んだ。一方で科学的な資源評価を信じる。漁獲の減少超。解消には、科学者と触れ合う機会づくりや、科学の説明を平易にする

もあつた。第1回の通り、アンケートでは科学的な資源評価を信用する考えの回答が30%で、信用できない考えの回答が44%。背景に、科学者との距離感が遠さが考えられる。科学的な資源評価を信じる。漁獲の減少超。解消には、科学者と触れ合う機会づくりや、科学の説明を平易にする

他、付度(そんたく)の検査が必要になる。ただ、日本海側の匿名漁業者が「必要」と阿部氏



科学と触れ合う機会を

付度排除や平易さも課題

者からは「バイカイで1人頭の漁獲量が減っている。アマダイやフグも減ったと思うが、漁協から情報がない。示してほしい」との声も。国の科学分析でも日本海のトラフ

たとしても認知度は低いのでは。』ここを探索すれば出る』などがあれば(宮城賢司氏)沖繩県、釣)「難しく科学を話されても分からない、簡単な説明を」(近藤高行氏)愛媛県、底引網)の指摘もあつた。

科学者と触れ合う機会を求める意見も複数。資源評価と漁業者の感覚のずれを指摘した北澤直諒

業する阿部誠二氏は「父親くらの世代の人は『潮や水温が悪い、昔は獲れたからまた獲れる』と簡単に片付けがちで、自分たちが獲り過ぎたという人は少ない。人は信じてほしいところだけ信じてしまふことがある。俺たちのせいじゃないよ」という指摘もあつた。

グやアカアマダイの資源は減っているとされているが、共有されていない。『マチ(ハマダイ)類の小型魚の漁獲を避けるべく個人的にネットで回遊情報を調べている。県の普及員とがっつり科学的な話をした記憶はない。数字(データ)がある

氏(千葉県、釣)は「科学者とのずれを埋めるには」実際に船に乗ってもらうのが一番です。愛媛県で素潜り漁を営む阿部和馬氏は「資源の科学情報には興味がある。『マダカアワビは一定数を割ると次世代を産めなくなる』などと勉強

ールが大切。科学者と漁業者で食事などの機会づくりも、漁業者の科学に対する抵抗感を払拭(ふっしょく)し、双方の信頼感を築く意義があると「つけ加えた。

「自身の主力漁法」の回答が28%、「どちらかといえば別の漁業」が47%。自分たちより他者の責任を感じる人が多かった。匿名漁業者からは「漁業者が人の意見に耳を傾けるのが苦手なのも問題。研究者から明確に漁獲を減らす必要性を言われると感情的になりがち。願望込みで環境変動を挙げ(漁業管理)問題がないと本気で思う

「研究者と漁業者の会話のキャッチボールが必要」と阿部氏

一部漁業者からは匿名で「年配漁業者ほど『科学は当てにならない』と学は当てるという問題提起も。宮城県で刺網を操

不公平な判断や責任転嫁も問題に

「獲り過ぎ」に「そう思う」「とてもそう思う」と答えた方にお聞きします。獲り過ぎを引き起こしているのは、主にどの漁業だと思いますか。以下から当てはまるものを選んでください

回答の選択肢	回答数
①自身の主力漁業	10.00% 5
②どちらかといえば「自身の主力漁業」	8.00% 4
③「自身の主力漁業」と「狙う魚種が自身の主力漁業と重なる別の漁業」の両方	16.00% 8
④どちらかといえば「狙う魚種が自身の主力漁業と重なる別の漁業」	10.00% 5
⑤狙う魚種が自身の主力漁業と重なる別の漁業	20.00% 10
⑥獲り過ぎに問題を感じていない	36.00% 18
全回答数: 50	

目で見ると外部の研究が必要では」と、付度の科学を求め声もあつた。次回、改革をめぐる漁業者と国の意識の乖離(かいり)を考える。(東京支社・太田毅人)